

バラの香り

中村祥二（会長）

はじめに

紀元1世紀頃の古代ローマでは贅沢の象徴はバラであった。バラを花の冠に、香水に、お風呂に、お菓子に、二日酔いの薬にと広く利用していた。

中世キリスト教世界ではバラはその官能をそそる美しさと香りのために、悪魔の誘惑の手だてと考えられて禁じられたという。バラも滅んで姿を消し、わずかに修道院の庭で細々と栽培されたに過ぎなかった。

ルネッサンス期に入るとバラも復活し、画家ボッティチェッリが1478年頃描いた絵画“春（プリマベラ）”に描かれている赤とピンクと白の3種類のバラはいずれも香りの良いバラである。

19世紀初めに、バラに革命的な出来事が起こった。ナポレオン皇帝の妃ジョゼフィーヌは、皇帝の権力と財力と広い視野の中で、史上類を見ない規模で世界中からバラを集め、マルメゾンの庭園で栽培と人工交雑を行った。最近マルメゾンの改修が報じられている。

この育種の技術が広がり、私たちがバラ園で見る様な四季咲きの華やかで多様な現代バラを生んだ。

ブルガリアローズ

Rosa damascena triginipetala

一花の香りの女王

十字軍遠征の時代、シリアからメソポタミアにいたる大帝国を建設した王サラディン（1138～1193年）は、1187年キリスト教徒から奪い返したエルサレムの回教寺院を清めようと、ローズウォーターを利用した。このためにダマスカスからはるばる数百頭のラクダでローズウォーターを運搬した。ブルガリアローズは、シリアを原産とするバラの種類でおそらく西暦1500年頃、トルコがバルカン半島を侵略したとき、ブルガリアに持ち込まれたものと思われる。ブルガリアの中央にある二つの山脈に挟まれた谷はバラの谷と呼ばれ、長さは約50kmに及ぶ。この山脈の間には、バラが栽培されている小さな谷が幾つかあり、山からの水がバラの成長を助け、山の

昼間の清涼な湿った空気が夜には谷間に下りてきて、香料のためのバラを育てる。これらの様々な好条件が、この素晴らしいカザンラックのバラをつくり上げている。（写真-1）

カザンラックのバラ祭りの折、畑で摘んだバラの花弁を数えてみると35枚のものが多かった。ブルガリアローズは、花の香りの女王と言われ、世界最高の香りをもっている。香りは透明感のある強い甘さの中にラズベリー、ピーチ様のフルーティーノートがあり、バニラ様の匂い、硫黄化合物からくる海の磯臭さを特徴的に感じる。この花からとれる香料は処方に少量用いるだけで香り全体に強さ、高級感、輝き、リフトを与える効果をもっていて、合成香料にはない天然ローズの生命力あふれる力強さを感じさせる。高級香水には、多かれ少なかれ使われる所以である。

日本でも多くのバラ園に植えられているので、ブルガリアに近い香りを嗅ぐことが出来る。

モダンローズ（現代バラ）

モダンローズとは、ギヨーJ.B.A.がハイブリッド・ティー系統の初めての品種‘ラ・フランス’を作出した1867年以降に育成された系統を指している。

ブルガリアローズの香りを見せると、けげんな顔をする人が多い。これはバラの香りではないというのだ。確かに身の回りを見るバラの香りとは印象が違う。

私たちが現在見慣れているバラの香りはソフトで軽く上品な甘さで親しみやすい。

現代バラにも優れた香りを持つものは多い。‘パパメイアン’‘芳純’は香りのコンテストで入賞する常連である。2005年の大阪で行われた世界バラ会議の芳香バラ審査部門では‘パパメイアン’が最優秀賞を獲得した。‘ハーモニー’はフルーティな特徴がある。ピンクがかかった青紫の‘ブルーパフェム’はブルー系の香りの頂点にある。‘ネージュパルファン’は見かけることは少ないが、小さな白い

花の強い芳香には驚かされる。‘ディオラマ’は中国バラの特徴をよく感じる。2007年に始まった国営越後丘陵公園の国際香りのバラ新品種コンクールでは国内外から‘エモーション・ブルー’、‘桃香’などの優れた香りの美しいバラが選ばれている。

現代バラの Hybrid Tea Rose の Tea（紅茶）を最も良く表している香りを持つのは Tea Rose（ティーローズ）の‘レディー・ヒリンドン’である。私はこのバラが好きだ。私たちの身の回りに

咲く四季咲きの現代バラに重要な役割を果たしたティーローズは中国のコウシンバラ（庚申バラ）の流れをくむ系統である。2013年秋、調布市にあるバラ祭りの神代植物公園のばら園にはこの‘レディー・ヒリンドン’が3カ所で咲いていた。朝露がまだ残っている花びらに顔をちかづけると、紛れもなく紅茶の香りを感じる。紅茶のダージリン・セカンドフラッシュを缶からさらさらと出して、缶の中を嗅いだ時とそっくりな香りがする。ティーローズの名前の由来を実感する。日が高くなるとこの香りが失われてくる。昼間なら木陰の‘レディー・ヒリンドン’を選ぶのがよい。この特徴的な香りは1,3-ジメトキシ-5-メチルベンゼンが関係している。

イングリッシュローズのミルラの香り

イングリッシュローズをよく見かけるようになった。イングリッシュローズは1960年代前半からイギリスのデビッド・オースチンが作出したバラの品種グループである。オールド・ガーデンローズとモダンローズの交配によって新しい特徴を出している。古いバラの華やかな香りと花弁の多さに、モダンローズの四季咲き性と豊かな色彩を併せ持つ興味あるバラ達である。全般に芳香が強く、その中にハーブのアニス シード様のやや重く青くさい甘さのある特



写真-1 摘み取った花 100 キログラムの山 この山 30 を蒸留すると香料 1 kg が採取できる

写真：資生堂リサーチセンター 提供

徴を感じる品種が多い。「ミルラ香」と表現される。

京成バラ園のイングリッシュローズのコーナーで、花盛りのバラを愛でに来た来園者の反応にしばらく耳を傾けてみた。「普通のバラの香りとは違うわね」「変わってる香りだけどいい香り」「変な香り」などの声が聞こえる。Hybrid Tea Rose になれた鼻には嗅ぎなれない香りと受け止められたことは確かである。

1845年ベルギーで作出された‘Belle Isis’（ベル・イシス）は強いミルラ香と記述されているからバラの世界ではかなり古くから「ミルラ香」と表現されていたことがわかる。

日本のバラの専門書や園芸誌によると、この香りは「神秘的なミルラの香り」といわれてきた。ミルラをそのまま日本語に訳すと『没薬』^{もつやく}となる。これはソマリアなどのカンラン科の樹木 *Commiphora myrrha* から滲出する樹液を自然乾固した赤褐色の芳香樹脂である。乳香と並び、古代エジプトでは最も神聖で貴重な薫香であった。香りは強いウッディ、グリーン、アンバーgris様である。

バラの愛好家80名ほどにバラの香りの話をした際、ミルラの樹脂を嗅いだことのある人は挙手して下さいとたずねたところ、挙げた人は一人もいなかった。本物のミルラの樹脂を身近に知るといのはそもそも無理な話なのだ。「神秘的なミルラの香り」といわれても仕方がない。ところが、イングリッシ



写真-2

Rosa arvensis Ayrshire Splendens

香りをかいているのは筆者

写真：前川美伸 撮影

ユローズのミルラ香は本物のミルラ樹脂と比べてみると香りが全く違う。バラの「神秘的なミルラの香り」の成分は研究されていて、p-メトキシスチレンであることが突き止められている。これと構造の似たp-ビニルフェノールを少量含むこともある。p-メトキシスチレンはアニスの香気成分であるアネトールとやや似た強い香気を持っているが、ミルラ樹脂らしい香りは全く感じられない。樹脂そのもの、それを焚いた香煙、樹脂から抽出した精油のいずれからでもp-メトキシスチレンは検出されなかった。

「ミルラ香」の源は系統図を調べてみてもなかなか分からない。ところが、デビット・オースチンの著書『David Austin's English Roses, p. 44, 1993.』のなかにその糸口があった。

「私たちのイングリッシュローズのミルラの香りがどのようにして生まれたのか、全く謎めいている。唯一、私が示唆することのできるのは、イングリッシュローズの元になる親の一つである Belle Isis の血統の中にミルラの香りのするバラとして知られていた Ayrshire Roses の一種があったことだ」そこで、イングリッシュローズのこの香りの起源を遡っていくと *Rosa arvensis* Ayrshire Splendens にたどり着いた。

越後丘陵公園でみつけたこのバラを嗅いでみるとp-メトキシスチレンを主成分とする珍しい香りのバラであった。(写真-2)

デビット・オースチン ローゼズ社のマリオット、M. によると、ここでいう「ミルラ」というのは、

日本で広く訳されているミルラ（没薬：*Commiphora myrrha*）ではなくて セリ科の Sweet cicely（スイート シスリー、学名：*Myrrhis odorata* 別名 Garden Myrrh、古名 Myrrh）意味しているということがわかった。『Marriot, M.: fragrant roses, The garden, 131, 60-61 (2006)』

それにしても、もうすこし早く発表してくれていれば、日本のバラ愛好家も混乱しないで済んだのにと思ってしまう。

ところで Sweet cicely というのは何者なのだろうか。『Lesley Bremnes (1995) ハーブの写真図鑑、193, 日本ヴォーグ社』に半ページほどの記述があった。ジャパン ハーブ ソサエティーの学術委員の成川貞子さんをお願いして Sweet cicely を探して頂いた。届いたハーブの小さな葉をかんでみると青臭さの中に甘いアニス様の香りが口に広がった。このハーブを鉢植えにして毎日眺めていたが、残念なことに私の庭ではどうしても育たなかった。

「神秘的なミルラの香り」という表現には、未知の香りに接するという心のときめきを感じられる。大切にしてもよい表現だと思う。この香りを知るにはイングリッシュローズの「グラミス・キャッスル」を嗅ぐのがよい。